

足利義政が応仁の乱の後に長年かけて自らが河原者を使って作った庭である。彼は愛する西芳寺を常に訪ね、それと同じ庭を作ることを理想としていた。このことは蔭涼軒日録に義政は石や樹木まで自ら選んでいたことが詳しく記されている。見所は滝、東求道前の白鶴島石組、石橋、上部石組みなどである。

一方、白川砂からなる銀沙灘、向月台はその発生の由来は諸説あるが、池の底浚いした白川砂を造形した、とする説が有力である。しかし、この時代には白砂を敷き模様を付けることが流行っていたので、「底浚い説」には疑問を感じる。その理由は東求堂と観音堂を移動した跡に白砂模様を意図的に描いたと思われる(次頁下段部分を参照されたい。銀閣寺『都名所図会』1780年、『都林泉名勝図会』上巻150P(1799年)、即宗院下巻62P参照)。

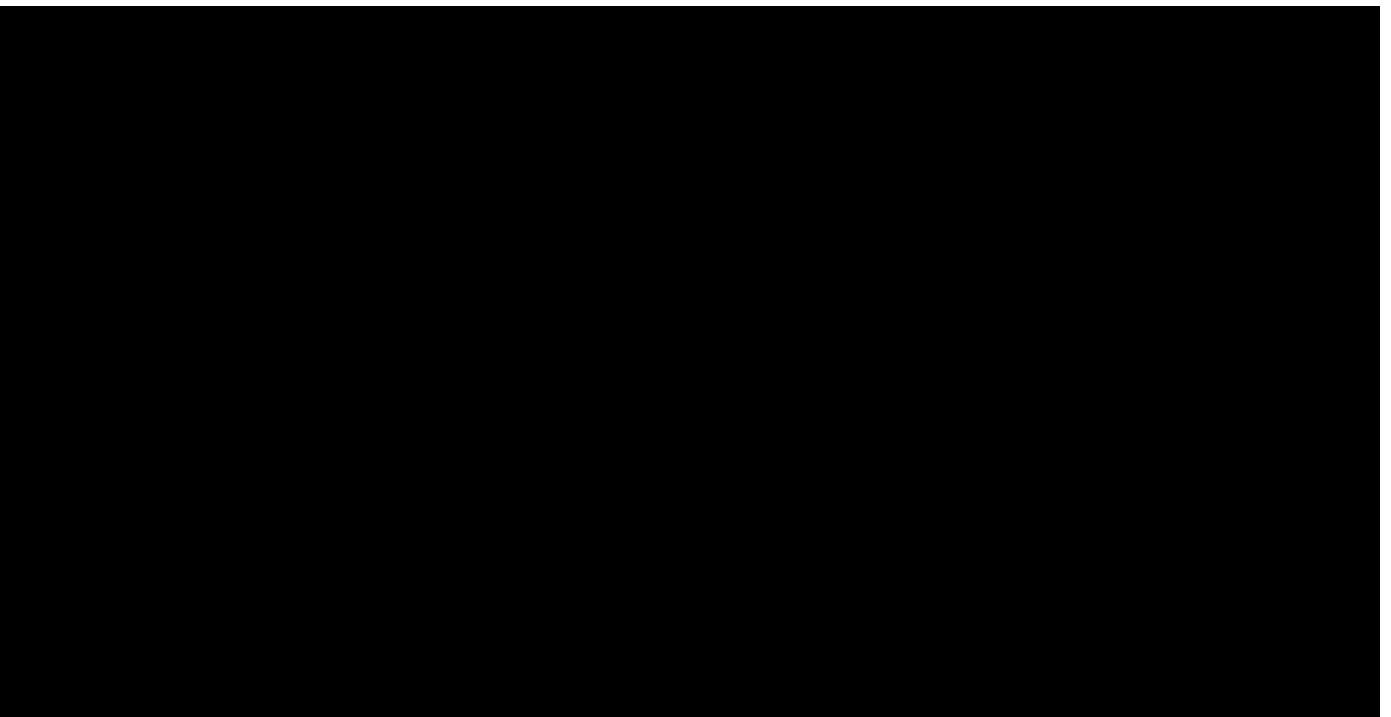
現在我々は銀沙灘、向月台などを抽象的な芸術として鑑賞しようとしているが、如何なものだろうか。庭園のど真ん中にこのような造形物が無い時には、どのような石や、建物があったのであろうか。義政の時代の作品を鑑賞したいものだ。第一この庭からは藤戸石(現在は三宝院にある)や九山八海石を初め、多くの石が持ち出されている。金閣、銀閣と並び称されているが、こと庭園に関してはずいぶん違っている。義政は家督問題に端を発した応仁の乱のさなか1473年將軍職を義尚に譲って、もっぱら山荘作りをし、8年後に亡くなった。蛇足ながら銀閣寺と言われたのは、江戸時代からで本来は観音殿といわれた。また銀箔は張られておらず漆塗りであったようだ。



東求堂と白鶴島: 写真の視点では鶴は休息している。東求堂は書院として最古のもの。



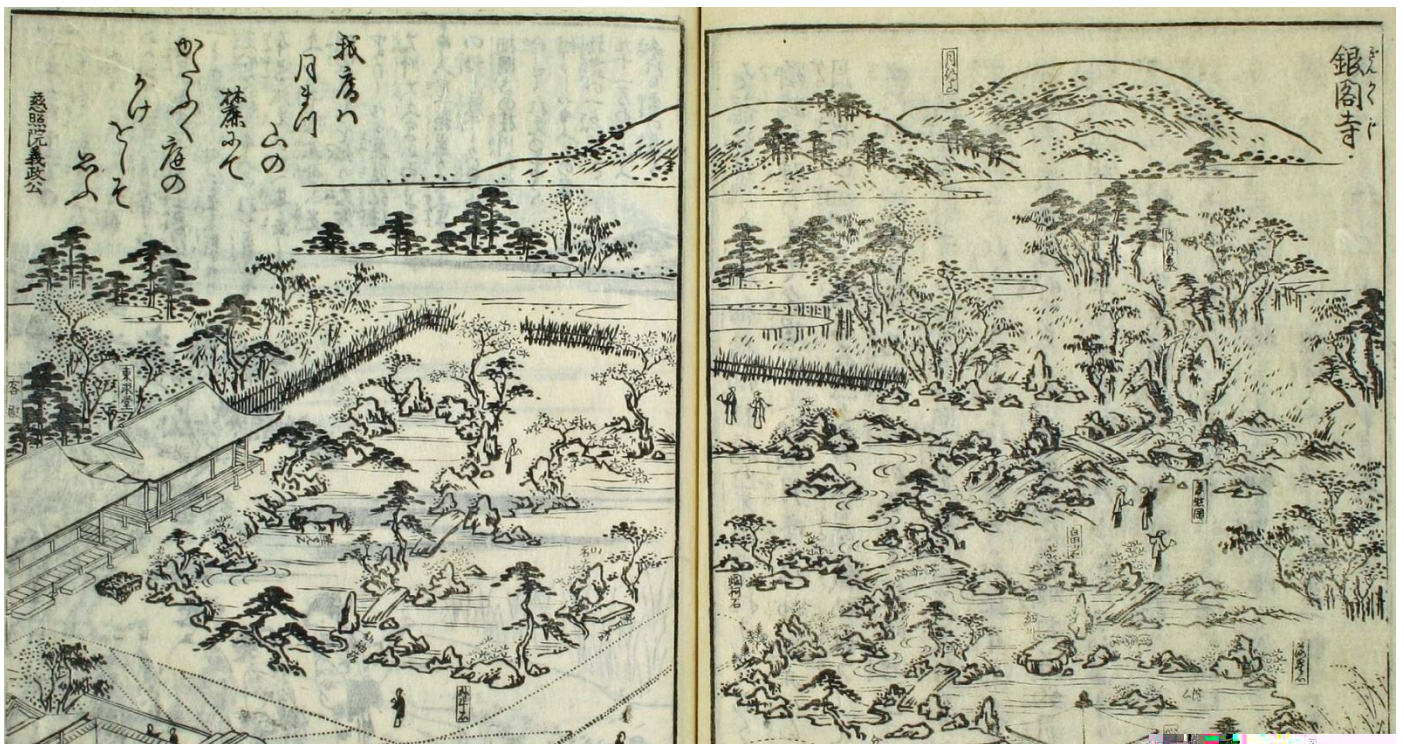
白鶴島の三尊石組: この石組の原点は苔寺の霞島であるが、供物石があるところは金閣寺の三尊石組に起因する。



東求堂より見た白鶴島 : 東求堂側から見ると中央にある三尊石が鶴の首に見え、島の両端にある橋が翼に見え、あたかも鶴が飛翔している姿に見える。画面中央の三尊石組は西芳寺をモデルとしている。また、白鶴島には左側の仙佳橋と、右側の仙袖橋(二橋)の三橋が架かっているが天龍寺の三橋に倣っている。本来、仙人の住む島には橋が架かっていないのであるが、この時代から橋が架かるような風潮が始まった。桃山時代には豪華な分厚い石橋が架かるようになる。

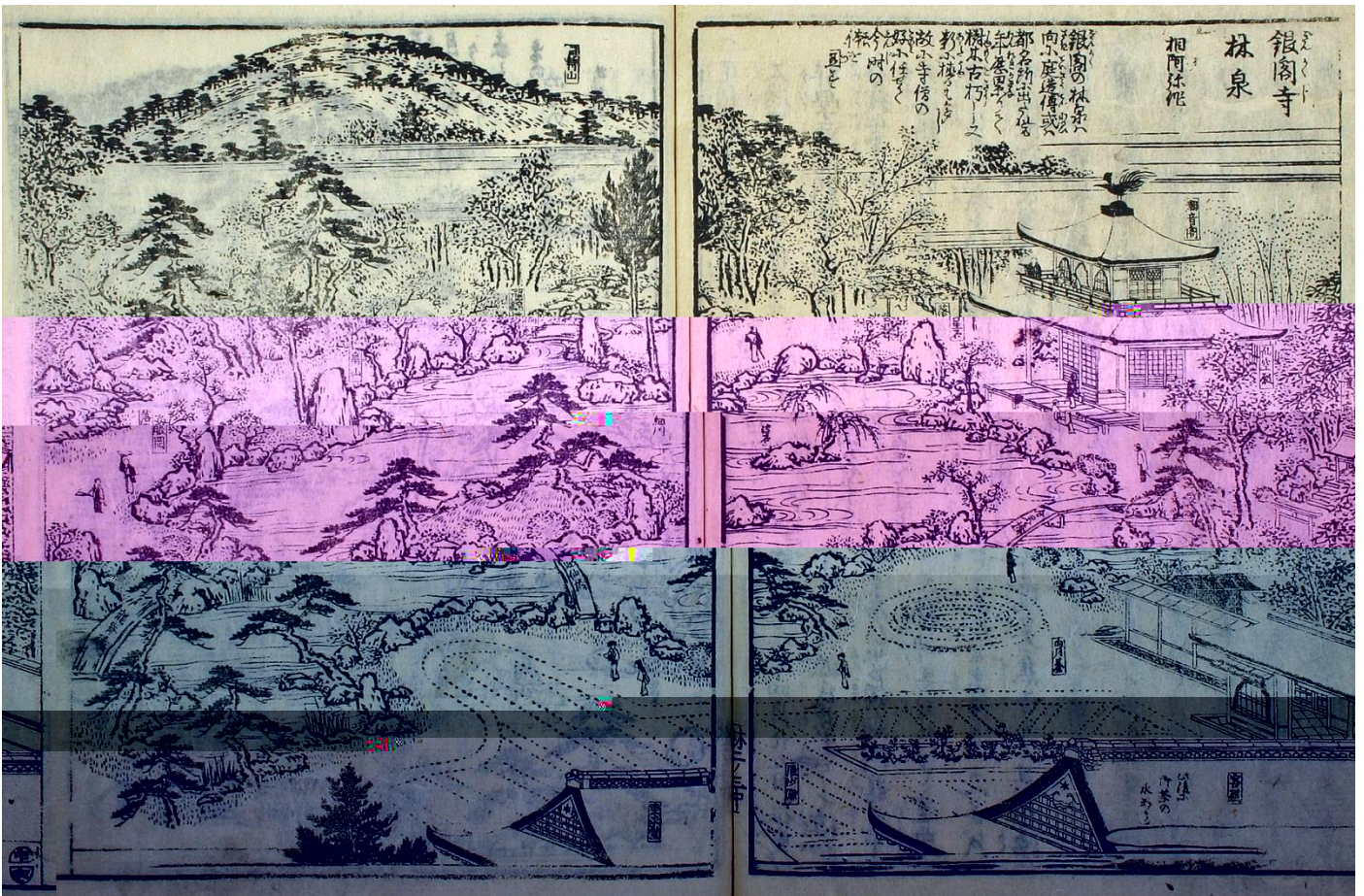


山上部石組みの下部に分裂した三角状の石があるが、作庭家の齋藤忠一氏の説では、鯉魚石の可能性を指摘している。

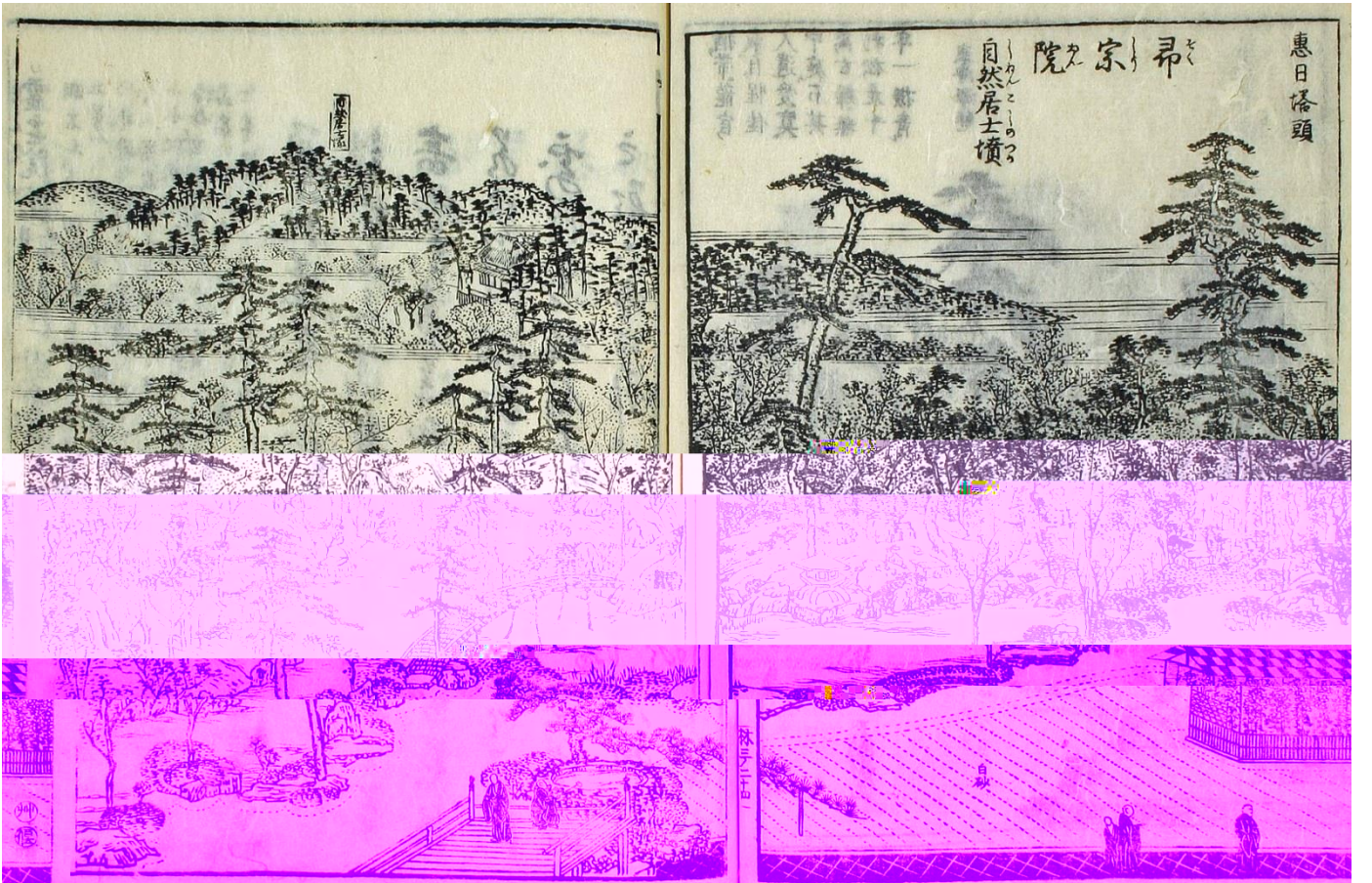


銀閣寺『都名所図会』1780年：銀紗灘の様子は現在の模様と異なっているが、向月台は低いけれどほぼ同じ形状だ。





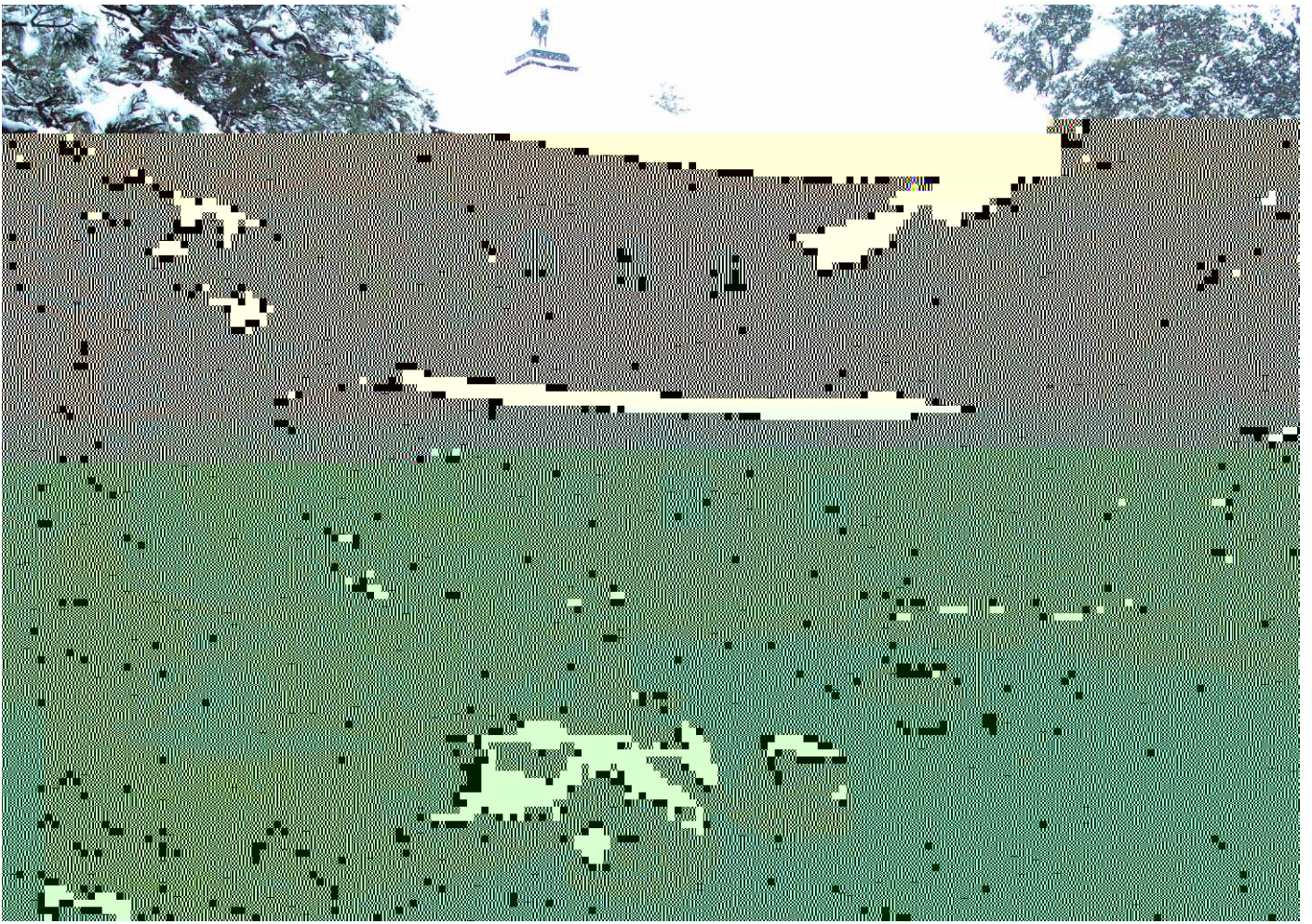
銀閣寺『都林泉名勝図会』上巻150P(1799年):左記図会より19年後の図会では現状に近い造形になっている。なお、向月台は19年前よりも幾分高くなっている。向月台や銀沙灘の図が、高さを示す表示になっている。



東福寺・即宗院『都林泉名勝図会』下巻62P(1799年):当庭は通路部分には瓦が敷かれ、白砂は多少厚く敷かれて、起伏のある造形を施している。最も銀閣寺の銀沙灘の様に近い。

備考)ここでは当時の寺院で白砂模様が描かれた例として即宗院を示したが、妙心寺・玉鳳院『都林泉名勝図会』下巻62P(1799年)、南禅寺・南禅院『都林泉名勝図会』上巻188P(1799年)、東福寺・霊源院『都林泉名勝図会』下巻58P(1799年)も参照されたい。





銀沙灘と向月台